

# I am Jazz! (ジャズ・スーパー列伝)

ジャズの発展に貢献し、その歴史に名を刻んだ名プレイヤーたち。その人生は、楽器が異なる如く千差万別。このコーナーでは、そんな個性的なジャズマンたちの功績を称え、生き様を紹介することで、より多くの人々にジャズの素晴らしさを伝えていきたい。

## Vol.10 Wynton Kelly【ウイントン・ケリー】

～ファンキー&ブルージーな名ピアニスト～



写真提供：ブルース・インターアクションズ・P-VINE レコード

### Profile

1931年12月2日ジャマイカで生まれる（ニューヨークのブルックリン生まれという説もある）。4歳の時にニューヨークのブルックリンに移住し、この頃よりピアノを弾き始める。1946年にレイ・アダムのR & Bバンドでプロ・デビューを果たす。その後ハル・シンガー、エディ・“ロックジョウ” デイビス等のR & Bバンドに参加し、カリブ海周辺を巡演するなどツアーで演奏する傍ら、レコーディングも経験する。また、「Music and Art High School」～「Metropolitan Vocational High」で音楽を学ぶが、学校ではベースと音楽理論を習っていた。1951年、ダイナ・ワシントンの伴奏を務めていた19歳の時にブルーノートから『ウイントン・ケリー・トリオ』でアルバム・デビューを果たす。その後、チャールズ・ミンガス、レスター・ヤング、ディジー・ガレスピー等と共演を重ね、52年からの2年間は軍隊に入隊。その後、55年から再びダイナ・ワシントンと共演し、57年からはディジー・ガレスピー楽団に参加。57年より自己のトリオで活動を開始。59年からはマイルス・デイビスのグループに在籍し、ベースのポール・チェンバースとドラムのジミー・コブと共に多大な評価を得る。63年、同グループ退団後は、黄金のリズム・セクションとして活躍した同僚ポール・チェンバース、ジミー・コブとトリオで活動し人気を博す。1964年7月、「ワールド・ジャズ・フェスティバル」出演のため自己のトリオで初来日。リーダー作以外にも、サイドマンとして数々の名盤に名を残す。意外に知られていないが、晩年のマイルス・デイビスのグループでも活躍した人気ベーシスト、マーカス・ミラーはウイントン・ケリーの甥にあたる。1971年4月12日でんかん性発作の為、カナダのトロントで死去。享年39歳。

## ケリー節全開！ ジャズ・ピアノ・トリオの決定盤！！



### Kelly Blue Wynton Kelly Trio & Sextet (ユニバーサル:UCCO-5016)

Wynton Kelly (p), Nat Adderley (cor), Benny Golson (ts), Bobby Jaspar (fl), Paul Chambers (b), Jimmy Cobb (ds)

1. Kelly Blue
2. Softly, As In A Morning Sunrise
3. On Green Dolphin Street
4. Willow Weep For Me
5. Keep It Moving (take 4)
6. Old Clothes
7. Do Nothin' Till You Hear From Me
8. Keep It Moving (take 3)

ウイントン・ケリーのピアノはミッドナイト・アワーがお似合い！



### Kelly At Midnight Wynton Kelly (Vee-Jay/P-Vine Records:BSCP-30035)

Wynton Kelly (p), Paul Chambers (b), "Philly" Joe Jones (ds)

1. Temperance
2. Weird Lullaby
3. On Stage
4. Skatin' 5. Pot Luck

## 哀愁たっぷり。晩年のケリーが残した渾身のライブ盤



### Final Notes Wynton Kelly (Vee-Jay/P-Vine Records:BSCP-30040)

Wynton Kelly (p), George Coleman (ts), Ron McClure (b), Jimmy Cobb (ds)

1. Introduction
2. Unit 7 3. Piano Interlude
4. Surrey With The Fringe On Top
5. On The Trail
6. Mr.P.C.

## 黄金のリズム・セクションの絆

ウイントン・ケリーはあのマイルス・デビシに「マッチのような存在感」『奴がいなくて、(演奏に)火がつかない』と言わしめた男。そのブルージーでファンキー且つ哀愁漂うピアノには、男でも惚れ惚れする独特の響き・哀愁・味わいがある。ケリーは1959から4年間、ポール・チェンバース(b)とジミー・コブ(ds)と共にマイルスの元で黄金のリズム・セクションとして活躍したが、この3人は同グループ脱退後も共に連れ添った仲。また、偉大な女性ジャズ歌手のダイナ・ワントンは、ジミー・コブとケリーがそれぞれ伴奏を務めていた時期があり、後にジミーの奥さんになったことでも有名。しかし一方、ケリーとも良い仲になったものの、ケリーとジミーは何事もなかったように友情関係を保ち続けたそうだ。そこには、まさにブラザー(?! )の関係を越えた強い絆が感じられる。余談だが、最近往年のケリーを彷彿とさせる活きの良いジャズ・ピアニストに注目している。今年2月にケリーのトリビュート作品『ケリー・ブルー』をリリースし、本誌vol.8の新譜コーナーでも取り上げたダン・ニマーという男だ！ ジミー・コブがドラムに参加していることでも注目の作品だが、ケリーに憧れ、ケリーのピアノを継承するダン・ニマーのスピード感とブルージーでファンキーな味わいは絶品！

タイトル曲「ケリー・ブルー」と「キーブ・イット・ムーヴィング」には、テナー・サクソフ、フルート、ホルネットの3管が加わるが、共に第1期マイルス・デビシ黄金クインテットのリズム・セクションを担ったポール・チェンバースとジミー・コブとの3人で贈るピアノ・トリオの最高傑作でもある。特にと言われれば、ブルージーさ極まりない「朝日のようにさわやかに」と、スイングでファンキーな「オン・グリーン・ドルフィン・ストリート」を挙げるが、どのナンバーも甲乙付け難いほど秀逸！ こんなにブルーでファンキーな味わいが出せるのはウイントン・ケリーのピアノだけ！ ジャズ・ベシストの手本としても価値ある作品。1959年録音。

こちらもマイルス・デビシ・クインテットの同僚であったポール・チェンバースとフリー・ジョー・ジョーンズがドラムを担当したウイントン・ケリーの代表作であり、ピアノ・トリオの名盤。オープニングの「テンパランス」から小粋なケリー節が心地良く響き渡り、チェンバースのベースとフリー・ジョーのドラムもスイングしまくる。哀愁のバラード「ウィアード・ララバイ」を挟んで、「オン・ステージ」でも弾ける最高の一時…。チェンバースの重厚なウオーキング・ベースに誘われるようにファンキーさ満点のケリーのピアノが冴え渡る「ポット・ラック」も最高！ 眼鏡をかけたケリーの表情が印象的なジャケットも粋だ。1960年録音。

その若すぎる死の約2年半前1968年9月22日にメリランド州ボルチモアの「フイマス・ボールルーム」(ジョン・コルトレーンの生前最後のライブが行われた場所でもある)で録音されたライブ盤。マイルス・デビシ・コンボで共演したテナー・サクソフ・ジョージ・コールマンをゲストに迎え、ベースにはロン・マクラーアが参加したケリー晩年の名作。ウエス・モンゴメリーとの白熱のライブを収めた『Smokin' At The Half Note』でもお馴染みの(ベシスト、サム・ジョーンズ作曲)「ユニット」や、コルトレーンがポール・チェンバースに捧げたナンバー「ミスターP.C.」のプレイもカッコよく、絶頂期を彷彿とさせる名作！

## 映像で拝むウイントン・ケリー

ケリーのプレイを映像で見ると、1959年のマイルス・デビシ・クインテットとキル・エヴァンス・オーケストラとの共演を収めたMiles Davis『Cool Jazz Sound』(DVD)がお薦め！ 『So What』『Duke』『Blues for Pablo』『New Rhumba』の4曲収録で、若き黄金のクインテットの姿が拝める貴重な記録。ケリーも渋い！

## 『ウイントン・ケリー・ジャズ・ピアノ奏法』

ウイントン・ケリーのジャズ・ピアノ奏法に関する書籍は、洋書では見かけることもあったが、和書ではヨーロッパを中心に活動しているピアニスト&作曲家の高瀬アキによる『ウイントン・ケリー・ジャズ・ピアノ奏法』があり、「Autumn Leaves」や「Willow Weep For Me」など、ケリーが愛した名曲スタンダード・ナンバーのコピー譜をはじめ、そのいぶし銀の奏法の特徴が分析されている。ウイントン・ケリーに憧れるジャズ・ピアニストたちは是非手に入れておきたい一冊だろう。また、『ジャズ・ピアノ・コレクション/ウイントン・ケリー』(楽譜)などもあるのでチェックしてみたい。どの楽器においても、ジャズ奏者はオリジナルティが命だが、まずはコピーから憧れのウイントン・ケリーに触れてみることも大切かもしれない。